

先週学びましたように、サマリア地方で魔術的な働きをして人々の心を奪っていた魔術師シモンを回心に至らせたのは、フィリポによる福音宣教としるしと奇跡によるものでした。そのサマリア地方でフィリポの活躍が認められると、エルサレム教会は十二使徒のペトロとヨハネを派遣し、ペトロは手を置いて聖霊を授けていきます。サマリアにおいては、フィリポの働きよりもペトロとヨハネの働きの方が用いられたように描かれています。ところがエチオピアの高官を導くために遣わされたのは、ペトロやヨハネではなく、フィリポでした。フィリポがバプテスマを受けた高官はエチオピアの女王カンダケに仕える重要な働きをする立場の人でした。この高官がイエス・キリストの福音を信じることによって、もしかすると、エチオピアの女王を初めとして王宮にいる人たちにも福音が告げ知らせられるかもしれません。そんな大切な働きのために、十二使徒のペトロやヨハネではなく、フィリポが選ばれたのでした。しかも今日の聖書の箇所ではフィリポは、サマリアで行ったようなしるしと奇跡を、何一つ行いませんでした。フィリポはただ、29節にありますように、霊が勧めるままに高官の乗った馬車に付いていき、高官が朗読していたイザヤ書の手引をただけでした。フィリポがイザヤ書から解き起こしてイエス様についての福音を告げ知らせると、高官の方からバプテスマを受けるのに何の妨げがあるでしょうか、と言って自らバプテスマを受けることを志願します。この間、フィリポのしたことは、聖書の解き明かしただけでした。神様はフィリポを用いて、エチオピアの高官にバプテスマを施したのでした。

今日の聖書の箇所を読んで、私たちはいったい何を学ばよいのでしょうか。私たちもフィリポのように、ある日突然、霊に導かれて誰かに聖書の解き明かしをしなければならぬ時が来るかもしれません。ええっ、そんなことがあるはずがない、と思われるのでしょうか。いいえ、あるのです。まったく見知らぬ人から声をかけられることはないかもしれませんが、知人や友人から聖書のことを聞かれることがないとは限りません。ほかに、家族から聞かれたり、親戚から聞かれたりする。そんな時、私たちはどのように対応するのでしょうか。聖書の話はよく分からないから、牧師に聞いてみて。そんなふうに答えるのでしょうか。もしかすると、あなたが主の霊から選ばれたフィリポの役割を担う人なのかもしれません。そのような時に備えるためにも、聖書の学びは必要なのです。家で一人で聖書を読んでも、なんだか難しくてわからないかもしれません。そこで私たちバプテスト教会では、一緒に聖書を学ぶ共同学習の場として、教会学校を用意したのです。学びの備えをしていれば、突然、聖書の話が聞かれても答えることができるかもしれません。いつでも答えることができるように十分に備えておくこと。教会学校の学びは、私たちにとって必要不可欠なことなのです。

そしてもう一つ、フィリポは霊に導かれるまま、見ず知らずの外国人に声をかけました。この当時、エチオピア人と言いますと、いわゆる黒人のことを言い表す言葉として用いられたようです。ただし、それは黒人の人たちをさげすんだ呼び方ではなく、この当時は黒人の黒い肌は、ユダヤ人やローマ人の間では驚きと称賛の対象でした。しかも、この宦官はエチオピアの女王の全財産の管理を任されていたので、さうとう身分が高く裕福な人であり、それに加えて彼は聖書を一生懸命に読んでいた神を敬う異邦人であったことが

わかります。その宦官がイザヤ書を声を出して読んでいると、そこでフィリポが“霊”に促されて馬車に近づいていき、宦官に声をかけます。「読んでいることがお分かりになりますか」。何とも大胆な行為です。サマリアではフィリポはさまざまなしや奇跡を行いました。サマリアの人々もフィリポの働きをよく知っていましたから、サマリアの人たちはフィリポが語る福音を好んで聞いたことでしょう。ところがここでは、まったく見ず知らずのフィリポが、身分の高い宦官にいきなり声をかけたのです。みなさんだったらこんな大胆なことをできるでしょうか。

私が福岡にいた頃、60代半ばのKさんというご婦人が信仰決心をされ、バプテスマの準備をしていました。Kさんは教会の近くに住んでおりました。Kさんは毎晩、近くの大濠公園を歩いていました。ある日、いつものようにKさんが大濠公園を散歩しているときに、隣を歩いていたまったく見ず知らずの女性に声をかけます。「あなたは教会に行ったことがありますか。教会はとても良いところですよ。一度、いらっしやいませんか」。声をかけられたその女性は、何と次の日曜日に礼拝にやってきたのです。声をかけられたその方は、残念ながら教会に繋がることはありませんでしたが、Kさんはバプテスマを受ける前、まだクリスチャンではなかったにもかかわらず、見知らぬ女性に声をかけ、教会に誘ったのです。今日の聖書の箇所にも、まったく見ず知らずの身分の高い外国人の宦官に、大胆にも声をかけるフィリポの姿が紹介されています。それはフィリポの人間的な思いではなく、“霊”に促されて起こされた神の出来事でした。フィリポは宦官に、聖書の箇所の解き明かしを行い、さらにイエス様の福音を語ったのです。そして水場にやってくると、宦官が自らバプテスマを受けることを申し出て、フィリポは宦官にバプテスマを授けます。フィリポの役目はそこまででした。役目を終えたフィリポは再び、主の霊によって連れ去られるのでした。

さて、今日の聖書の箇所は、全体が特徴的な2つの出来事によって挟まれています。冒頭の26節では、主の天使がフィリポに「ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道へ行け」と命じます。フィリポは、先週学びましたように、サマリア地方にいました。サマリアはユダヤの北にあります。その場所から、ユダヤの首都エルサレムからガザに下る道を南に下れという主の天使の命令を受けました。今いる場所とまったく逆の方へ行くと主の天使は語るのです。そして、今日の聖書の箇所の最後の方の39節では、フィリポがエチオピアの高官にバプテスマを授けて水から上がるとすぐに、主の霊がフィリポを連れ去り、今度はアゾトに姿を現わし、福音を告げ知らせながらカイサリアまで行ったことが記されています。アゾトはガザから海岸線沿いに北に向かって40キロほど行った町で、カイサリアはさらにその北100キロほど進んだところにあります。フィリポは主の働きが済むと、またしてもまったく反対の方向へと連れていかれたのです。

こうしてみますと、このエチオピアの高官がバプテスマを受けて救われるために働いたのは、主の天使であり、主の霊だということがわかります。今日の聖書の箇所で起こった出来事、異邦人のバプテスマの出来事はすべて、主なる神様の出来事なのです。そのような主なる神様の出来事の導き手としてフィリポは選ばれ、その働きを託されたのでした。主の天使がフィリポに行くべき道を指し示し、宦官の馬車に近づくようにフィリポに促し、働きを終えたフィリポを再び連れ去りました。ここでは、主なる神様の福音宣教の働きが

行われたのです。けれどもここで大切なことは、フィリポという人がいなかったらこの出来事は起こらなかったということです。神様は御自身の福音宣教の働きのために、私たち人間を用いてくださいます。人間の力など必要とされないのに、あえて私たちを用いてくださるのです。なぜなら、神の福音は、人から人へと宣べ伝えられなければならないからです。フィリポは神様から選ばれ、用いられました。もしフィリポが勇気を出して宦官に声をかけなかったなら、この出来事は起こりませんでした。またフィリポが、宦官が読んでいた聖書の箇所を解き明かしができなかったなら、この出来事はなかったことでしょう。ここに、主役ではないけれども手引をする人の重要な役割が表されています。声をかける勇気と、聖書を解き明かすための力。フィリポのような働きを行うためには、この勇気と聖書の学びを身に着けなければなりません。フィリポが普段から聖書を学び、勇気をもってエチオピアの宦官に声をかけたからこそ、ユダヤ人ではない異邦人のバプテスマという出来事が起こったのです。私たちもフィリポのように、主の福音宣教の働きのために、豊かに用いられていきたい。そのための備えを普段から十分に行っていきたいと願います。お祈りしましょう。